



志度高だより 一飛翔の窓一

第118号
(H22.11.26)

「自由と平和」

新聞を読んで、まさかそんなことが、と思った人も多いと思うが、それは紛れもない事実だった。北朝鮮が韓国を砲撃した。北朝鮮によれば、彼らの云う境界線を越えての韓国の軍事演習に対抗する「断固とした軍事措置」とのことであるが、北朝鮮のやり方は少々乱暴で稚拙としか言いようがない。これでまた北朝鮮への風当たりが強くなる。この劇画的とも思える北朝鮮の行動は、六カ国協議を俎上にのせるどころか、まな板を遠くに蹴飛ばした格好となった。

この『志度高だより』で、政治を云々しようとは思わない。なぜなら教師という私の立場に鑑みれば、少しでも私のイズムを出せば、公務員としての中立性を欠くことになるからだ。とはいえ、自由と平和については、一般論として触れたい。

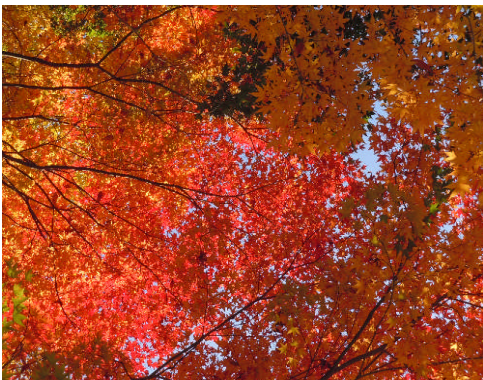
今の日本は完全に平和ぼけしている。少なくとも私はそう思う。国会議員も含めて国民全体に緊張感というか危機感がまったくない。先の大戦が終わって65年になる。戦争を知る人が年々少なくなり、もう少しで戦争を知らない人間ばかりになる。薄れゆく戦争。これが日本という国が背負おうとしている現実なのか。消費社会にどっぷりつかった今の日本人には、過去の大戦はあくまで過去の出来事ではないのか。広島も長崎も忘却の彼方に押しやられるのか。恥ずかしいことだが、かく言う私も戦後世代の一人で、戦争を肌に痛みをもって感じない。



外国に出た人なら分かると思うが、ある国では水のほうがビールやワインより高い。日本では水はただ。日本人は、自由と平和も水と同じで、ただでもらえるものと思いついでいやしないか。厭みを言うようだが、世界広しといえども、自由と平和がただで手に入る国がどこにある。昔、元寇の襲来というのがあったが、四方を海に囲まれた日本は、運良く台風かつむじ風が起こって難を逃れた。それも二度。以後、黒船が来るまで日本には有事のときがなく、国防に無頓着だった。だから日本人は自由と平和に対して安穩としていられるのかもしれない。

大陸の国々は、戦いの歴史の上に成り立っている。人々は多くの命を犠牲に自由と平和を勝ち取った。だからいったん手にした自由と平和はどんなことがあっても死守しようとする。当たり前のことだ。棚ぼた式の自由と平和なんてありえないのだ。イスラエルがどうして軍備に莫大な国家予算を費やすか、それも頷けるはず。

「ええ！？日本って戦争したの。あたし知らなかったわ」「あたしも」髪を金髪に染めたおねえちゃんたちが、携帯電話片手に真顔でそう言った。「もし日本が侵略されそうになったら戦いますか？」この質問に、はい、と答えた日本の高校生は10%に満たない。どこかへ逃げる。こんな意見が圧倒的に多かった。因みに同じ質問を多民族国家であるアメリカの高校生にしてみた。すると80%強の高校生が、はい、と答えた。価値観も多種多様の移民の国でありながら、いざ国家の危機となれば一致団結して戦う。それに比べ9割が逃げるといふ日本はどうなっているのだ。若者たちは日本という国にもはや愛着を示さない。いや、もしかすると腑抜けになった日本という国に愛想をつかしたのかもしれない。自由と平和の持つ意味の重さを知らない人間に、自分の国を思え、と言っても無理がある。



それどころか、自由と平和という言葉、今の日本人は自分たちの権利を主張をするときに、隠し持ったナイフのように持ち出してくる。まるで水戸黄門の印籠のように。「日本は平和な法治国家。だから私たちはしたいことをする自由があるはず」本当だろうか。自由には責任が伴う。自由だからこそ自己をコントロールする良識と理性が求められる。自由と平和を一度でも失ったことがある人間は、手にした自由と平和の本当の有り難さを知っているし、二度とそれを失いたくないと思う。

知ったそうな口をきくが、この私も本当の自由と平和の重みを知らない。砲弾が雨あられのように降り注ぎ、無辜の民が逃げまどう韓国の惨状を目にして、日本がいかに恵まれた国であるか、改めて思い知らされた。物質的贅に溺れることなく、平穏な日々の中につつましやかな幸せを見出せることに、心から感謝しなければいけない。でないと、日本という国は亡びる。